

# 指導実践につながる教員養成における「うごきとダンス」の指導

佐分利 育 代\*<sup>1</sup>, 松 本 典 子\*<sup>2</sup>

## Teaching Movement and Dance in Teacher-Training Course for Practice

SABURI, Ikuyo\*<sup>1</sup>, MATSUMOTO, Noriko\*<sup>2</sup>

### はじめに

小学校指導要領の改定では、総合的学習、からだほぐし等従来の教科、種目を越えた学習内容の捉え直しがさらに進み、教員にもより柔軟な教材研究や支援の力が求められようとしている。そして教員養成課程における教材研究の授業で、何を学生に体験させ身につけさせられるかの課題は、限られた時間数に何ができるかの問題をともなっていますますます大きくなっている。

「教員養成におけるダンス教育の課題」(佐分利, 1996)では、現職教員へのアンケート調査(松本富子他, 1994)から得られた課題のうち「一年未満のダンスの教材研究受講で指導実践につながるには」について、6回の授業でどんな指導観を持たせられるかを鳥取大学の小学校体育教材研究の受講生を対象に検証した。その結果、受講を通して得たダンス観を子どもにも味わわせることに向けて、「子どもを踊りの世界に引き込む」「子どものやりたいことを引き出す」「子どもの豊かな発想を活かす」の指導観を持ったことがわかった。しかし、90分6回の授業で指導実践への第一歩である「楽しさ」や、ダンス観、指導観を持たせられたとしても、それが卒業後も残るかまた、実際の指導力としての実感をどう待たせられるかが課題としてさらに残った。

本研究ではこの課題について、受講生への調査によって鳥取大学での小学校体育教材研究の授業内容を点検するとともに、指導の発想への具体的な手がかりとなりうる「もの」を使った学習内容の展開例を作成し、指導実践につながる効果的な教材研究の授業内容を検討したい。

なお、本研究では特に小学生・幼児の段階における身体表現の活動を、からだの「うごき」そのものから「感じを持ったうごき」までのダンスの基礎としての活動を包括する意味で「うごきとダンス」として考察する。

### 1. 方法

実際の指導力としての実感を持たせ、実践につながる、「うごきとダンス」の教材研究について

\*<sup>1</sup> 芸術表現講座

\*<sup>2</sup> 鳥取女子短期大学

以下の方法で検討する。

(1) 「うごきとダンス」の教材研究の授業内容に対する受講生の評価

1999年度3年次対象の小学校体育教材研究の受講生を対象に内容が理解できたかまた、自分でも指導できると思うかを質問紙により調査する。

(2) 「うごきとダンス」の学習展開への発想の調査

「タオル」を使ってどんな学習が展開できるかについて、教材研究の授業前後に自由記述を比較し、受講が指導への発想を高められたか検証する。

(3) 「うごきとダンス」指導の発想を支えるための、「もの」を使った学習展開例の作成

## 2. 結果と考察

(1) 「うごきとダンス」の教材研究の授業内容に対する受講生の評価

1999年度の鳥取大学教育学部3年次指定「小学校体育(演)」での「うごきとダンス」(表現運動)の教材研究の授業は90分6回を、表現技能の発達段階(佐分利, 1986)を元にウォーミングアップ、即興、表現、リズムカルなダンス、フォークダンスの内容で進めた。教材研究ではあるが、ダンス未経験の受講者が多いため受講生自身の「うごきとダンス」の経験と「好きになってもらうこと」を第一目標に指導者主導で進めている。「好きになってもらうこと」とを「指導したい」につなげるために、主となる内容はできるだけ精選した。また、学習過程における次の段階への手がかりも、できるだけ飛躍しすぎないもの、具体的なものを準備するようにした。

受講生は3年生以上で、2年次指定の「小学校体育(実)」(陸上運動と器械運動、及び水泳の教材研究)を受講し終わった、あるいは平行履修中の学生76名でA B 2クラスに分かれて、ボール運動と交互に6回ずつ受講した。授業は鳥取大学第1体育館で行った。

教材研究の授業内容理解に関して最終の授業終了時に質問紙で調査した。授業内容の再確認と「うごきとダンス」の学習段階による内容を受講生に整理してもう一度伝えたいとの考えから選んだ19の内容について、1.「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」2.「理解して取り組めたが、自分には指導できない」3.「理解とまではいかないがいつの間にか踊っていた」4.「あまり理解できなかった」5.「全く理解できなかった」の5段階で評価させた。

内容は以下の通りである。

A. うごきとダンス・ウォーミングアップ

1. 2人組でのからだほぐし 粘土をこねろ!
2. 伸びる縮む→ウエーブ いろいろなジャンプで
3. 座ってリズムに乗って 膝たたき、お尻で歩く腕だけのダンス等
4. 立ってリズムにのって 拍手、いろいろなスキップ等

B. フォークダンス

5. ぴょんぴょんとんで
6. パティケーキポルカ
7. 新作傘踊り

C. 即興表現

8. ものを手がかりとして 割り箸を使って
9. リズムに乗って踊ろう「めちゃくちゃダンス」

D. 表現

- 10. 新聞君 新聞でいろいろ動こう
- 11. 新聞君の真似をしよう
- 12. グループで色々見つけて続けて踊る
- 13. シャボン玉 動きを見つけよう
- 14. 一番好きな動きに始めと終わりをつけてまとめる
- 15. 発表し、感想を言い合う
- 16. スポーツ 二人でスポーツの動きを見つける
- 17. 応援のダンスA, スポーツの動きBとしてABAの形式でまとめ、踊り込む→発表

E. リズミカルなダンス

- 18. リズムにのっていろいろ動く
- 19. スポーツ応援のダンスを創る

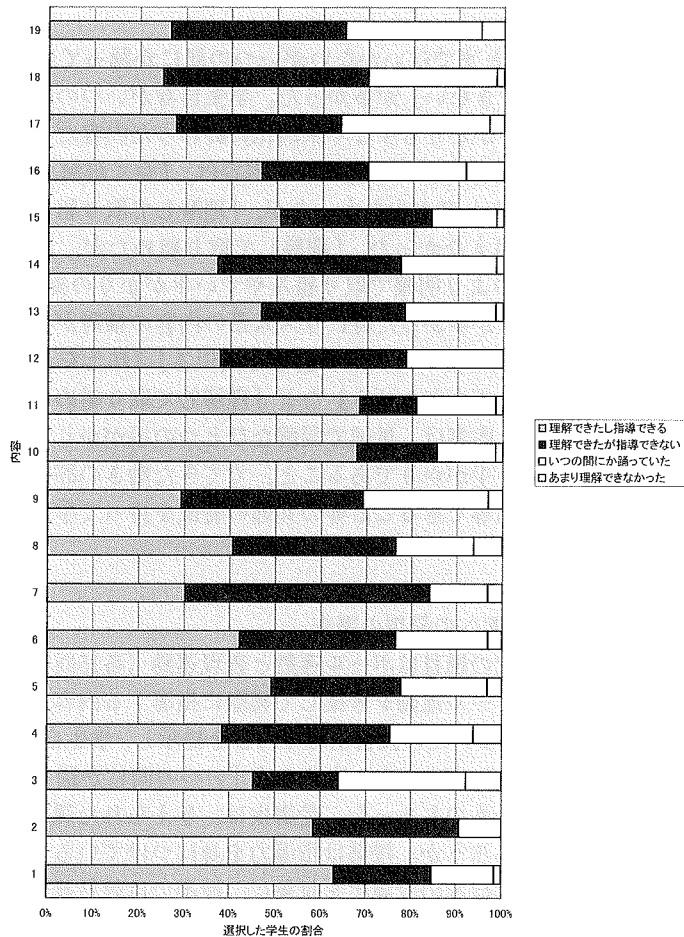


図 1. 内容の理解と指導力への実感

集計結果は図1のようである。「全く理解できなかった」としたものはなかった。

『11.新聞君を真似しよう』『10.新聞でいろいろ動こう』『1.2人組でのからだほぐし 粘土をこねろ!』は、60%以上の学生が「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」と回答した。『2.伸びる縮む→ウエーブ いろいろなジャンプで』も60%に近かった。手がかりが具体的であったこと、誰にでもできる明確なひとつの手がかりで、思いがけなく広がりのある活動が引き出せることが評価されたと考えられる。

しかし、他の内容は半分以上の学生が「指導できる」とは答えていない。そのなかで、「理解とまではいかないがいつの間にか踊っていた」を選択した者の割合が高いのは、特にリズム系の内容であった。楽しさの印象だけが残る、指導実践にはつながらない可能性がある。授業では学生が良く動き、効果的な内容だったと思えても実は、教材研究の授業内容としては指導力の実感を持たせる内容を準備できなかったと言える。リズム系の内容については指導内容の明確化、具体化、導入からの段階的指導法をもっと客観的にして提示すべきであるとわかった。特に、ステップを教えることと子どもから引き出すこと、学生をのせることと教材研究として取り組ませることのかねあいが、この内容では不完全であった。

『7.新作傘踊り』では、「理解とまではいかないがいつの間にか踊っていた」が少なく「理解して取り組めたが、自分には指導できない」が多かった。学生自身がいつの間にかのって踊れるほどの手がかりも、指導法に対する手がかりも少なく未消化に終わった内容だった。

以上のように1999年度の小学校体育教材研究の授業内容は、「全く理解できなかった」とした者はなく、「あまり理解できなかった」者も少なかったが、「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」者も多いとは言えなかった。「理解して取り組めたが、自分には指導できない」を「指導できそう」にするためのより明確で取り組みやすい手がかりの提示、「理解とまではいかないがいつの間にか踊っていた」が多かった特にリズム系の内容の検討が必要である。

『新聞君を真似しよう=新聞紙に描いた人形の動きを真似る』『粘土をこねろ=友だちのからだを粘土に見立てていろいろなポーズをとらせる』など「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」が比較的多かった内容は、単純で明解なひとつの手がかりからいろいろなうごきが引き出せること、取り組みやすい手がかりであること、でてきた動きの評価がわかりやすいこと、言葉での説明があまりなくても指導できること等の共通の特徴を持って学生に提示できていたのではないと思われる。

## (2) 「うごきとダンス」の学習展開への発想の調査

3年次での小学校体育教材研究の種目はボール運動と表現運動(各15回)である。このうちボール運動では、グループで新しいボール運動を考案して実際に指導する内容で行われているが表現運動では、ダンス未経験の受講者が多いため教官主導で内容を提示し、学生自身の「うごきとダンス」経験と教材研究を合わせて行っている。(1)の結果では「いつの間にか踊っていた」を選択した学生が内容によっては30%を越えたものもあった。受講生は、与えられた課題を小学生や幼児と同じように楽しんでいるだけなのであろうか。授業は指導力を身につけていると言えるのであろうか。このことについて1999年度の教材研究の受講生を対象に、授業では教材研究の内容に入れていない「タオル」を使ってどんな学習が展開できると思うかを授業の前後に自由記述させ比較した。有効回答者数は65名(女子56,男子9)であった。

### ①受講前の学生が考えた「タオル」を使った学習展開

受講前の調査で学生が上げたタオルを使った学習内容は平均1.7種類だった。その中で最も多くの者が上げていたのは「綱引き」系の運動で30%の者が上げていた。そのほか「縄跳び」が23%、「しっぽ取りゲーム」16%が目立ち、運動道具の代用品としてのタオルの使用がほとんどだった。「曲に合わせてひらひらさせる」「マントにを使って踊る」などタオルの特性を利用した「うごきとダンス」の内容を発想した者は10%とわずかであった。また、学生の記述は運動の名称か運動の方法を簡単に示しているもので、学習展開にまで至るものではなかった。

### ②受講後の学生が考えた「タオル」を使った学習展開

受講後には、学生一人あたりがあげた内容の平均は3.0種類に増え、「うごきとダンス」に関する内容をあげていたのは74%の49名になった。その内授業で行った「うごきとダンス」の内容を「タオルバージョン」として応用していた者が58% (39名)、それ以外の内容も43% (28名)があげていた。「うごきとダンス」以外ではボール運動や陸上運動の内容を工夫した者もあった。

授業内容の「タオルバージョン」としての応用では、前述の内容の内『11.新聞君の真似をしよう』21名、『10.新聞でいろいろ動こう』4名、『9.リズムに乗って踊ろう「めちゃくちゃダンス」』8名、『8.ものを手がかりとして 割り箸を使って』6名、その他『2.伸びる縮む→ウエーブ いろいろなジャンプで』『16.スポーツ 二人でスポーツの動きを見つける』『12.グループで色々見つけて続けて踊る』等があった。中には3種類の内容を応用しているものもあった。

授業内容以外の「うごきとダンス」の発想としては、『タオルを手に持って踊る』が15名、『タオルで変身』『タオルを使って何かを表現』も15名あった。『タオルを手に持って踊る』では授業内容の『9.リズムに乗って踊ろう「めちゃくちゃダンス」』と結びつけて展開させた者も4名あった。

受講前の回答と大きく異なった点は、図示などで活動の方法を説明している者27名、各内容に対して具体的な運動の例を示している者25名、学習の展開や指導過程を書いている者15名、教材観を示している者12名などがあつたことである。それらには、『11.新聞君の真似をしよう』のタオルバージョンから『タオルを使って何かを表現』や『乾いたタオルや濡れたタオルを表現』への展開例を示しているものがあつた。

また、教材研究の授業内容の応用について、『11.新聞君の真似をしよう』が多く応用されたのは「もの」を使った指導という共通点からであるが、前項での授業内容に対する評価で「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」が多かつたことも応用の発想に結びついたのである。「指導できそう」とした者が比較的少なかつた『9.リズムに乗って踊ろう「めちゃくちゃダンス」』や『8.ものを手がかりとして 割り箸を使って』内容についても複数の者が応用しており、経験が発想の手がかりにはなることがわかつた。

以上のように、「うごきとダンス」に関する内容を上げるものの増加、教材研究の授業内容が応用されていたことから授業の体験が教材の取り入れ方やその指導への発想の手がかりにはなつていると言えそうである。そして、ボール運動での模擬授業が、「うごきとダンス」の内容の工夫や学習展開にも結びついたのであると思われる。

### (3)「うごきとダンス」指導の発想を支えるための、「もの」を使った学習展開例の作成

#### ①「うごきとダンス」の学習における教材としての「もの」の可能性

1999年の教材研究の授業内容でも学生の評価が高かつた教材としての新聞紙は、「うごきとダン

ス」の学習における最初の壁である「恥ずかしさ」を学習者に感じさせず、表現の素材であるからだの様々な動きを引き出し、「とらえ表す」明確な手がかりを与え、工夫しながら友だちと取り組む楽しさや発想の広がりをお手伝いしてくれるなど、有用な指導への手がかりとされている（佐分利，1984. 村田，1996. 宮本，1997. 桑原，1992. 柴，1993.）。経験的にも新聞紙は、年齢、性別、障害にも関わりなく活発な学習展開を可能にする教材である。「できそうだ」と思える指導の手がかりをひとつ持つことが指導実践と教材研究継続への第一歩であり、そのことは先の調査結果にも現れていたと言える。

「うごきとダンス」学習における新聞紙を「もの」に置き換えても、動きを引き出すことと、とらえ表す表現への手がかりとなるものとして有用であるとするのに異見はないと思われる。とらえ表す表現の手がかりとして「もの」を学習の場に持ち込むことはすなわち、「原体験」を動きのイメージとして享受する仕方そのものを学習に取り込むことであり、ダイレクトにからだの動きでの表現に結びつく（佐分利，1989）。

「もの」を動かしながらからだのコントロールを覚え、「もの」を持ったつもりで動けば名選手や手品師のような気分が味わえる。「もの」の動かし方を工夫し「もの」の動きを追体験することでからだは思いがけない動きを発見し、「もの」の動きの感じを味わい「もの」の気持ちまで体験する。これら全てが「うごきとダンス」の楽しみであり、この全ての楽しさを包含している「もの」を学習の導入、展開の各段階でタイミング良く準備するのが指導者の役割であろう。そのためには、「もの」を使ってどんな活動を展開できるのかの具体的な内容、その意味をとらえている必要がある。この見通しがつくことがひとつの指導力の実感として学生に蓄えられるのではないかと考える。

## ② 「ボール」を使った「うごきとダンス」の学習展開

「うごきとダンス」の指導における「もの」を使った学習展開の具体例を、ボールを例に検討したのが図2である（佐分利・松本典子，1999）。『うごきづくり』と『うごきの感じ』のに分けて「ボール」の役割や使い方とその展開を探った。

図の中央、「ボール」を使ったいろいろな運動の体験は全ての展開へのベースであり、学習においては導入段階での活動である。『うごきづくり』での「ボール」は、それを操作するおもしろさや動く楽しさを体験しながら全身の協応性や運動感覚の獲得を目指して使われる。すなわち基本的な動作に様々な条件を加え、それに対応して「ボール」と一体になって動く、あるいは動こうとする体験が、興味と多様な全身の動きを引き出す場となる。一方『うごきの感じ』の学習の手がかりとしての「ボール」は、使い方の工夫、動きへの挑戦、変身への小道具や舞台装置、衣装、表現への原体験など、とらえ表す活動の全ての可能性を包含している。

教員養成の学生の小学校、中学校時におけるボールを使った運動やあそびの経験について調査したところ、大人がつくったルールの中でのゲーム遊びの経験がほとんどであった。特に小学校低学年以下でのボール操作の基本的な運動や、歌などのリズムに合わせてボールをつく遊びに親しんだ子どもは少なく、その経験なしに小学校高学年以降の競技スポーツに入っている傾向がうかがえた（佐分利・松本，1999）。対象は1999年度、鳥取大学教育学部小学校教員養成課程3年次生女子56名、男子9名、鳥取女子短期大学幼児教育学科2年次生103名、1年次生71名である。

教員になろうとしている学生の実体験がこのように少ないことから、ボールという「もの」の持つ動きの可能性を教材研究の授業を通して図2のような形で把握させることは、指導への発想の手がかりとして有用であると思われる。

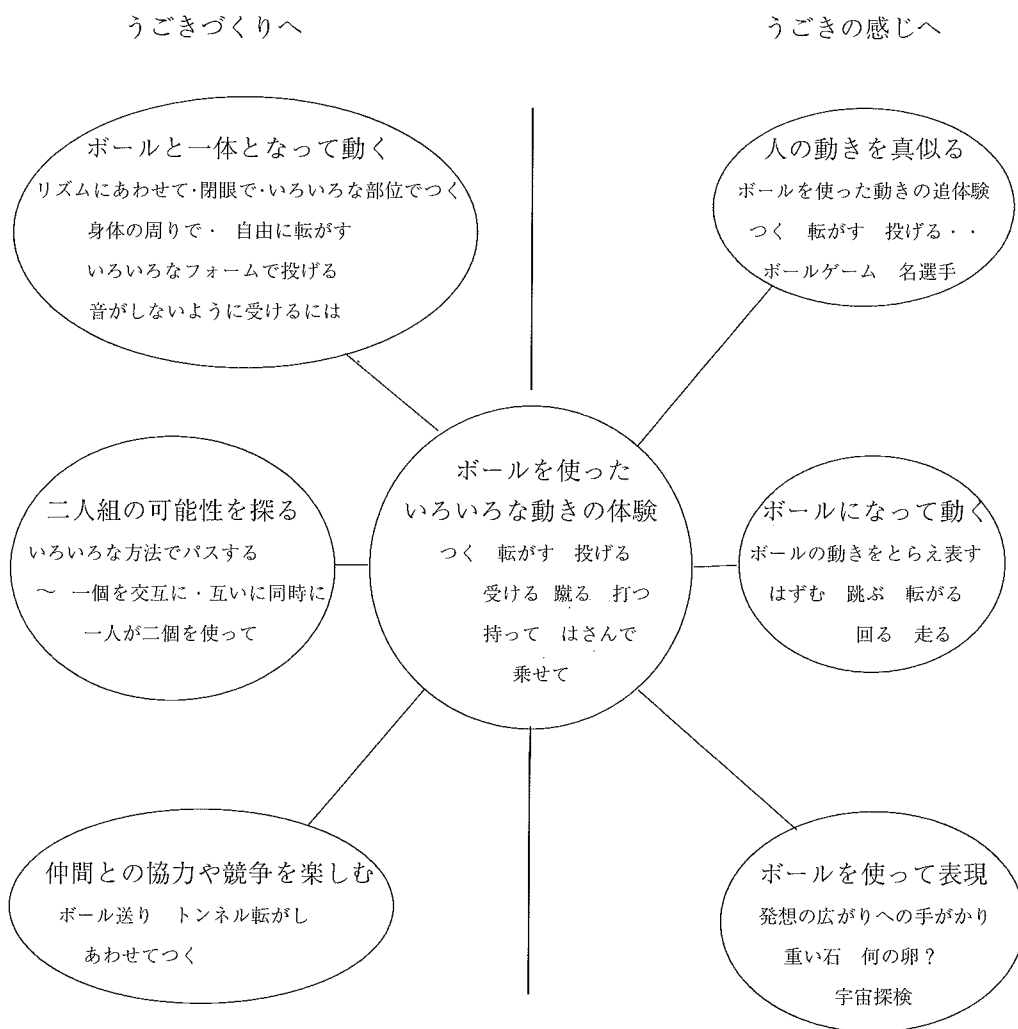


図2. 「ボールを使った運動」を例にした学習展開

③ 「もの」を使った「うごきとダンス」の学習展開

『うごきづくり』と『うごきの感じ』は、同じ「うごき」がどのように展開できるか具体的に把握し子どもたちの活動を支援できるための手がかりである。これらは指導への発想の手がかりとして指導実践を導く。図2のボールを様々な「もの」にかえてそれぞれの展開を考えることも可能である。先の学生を対象にした学習展開への発想の調査と関連して、図3に「新聞紙」、図4に「タオル」を使った展開を試みた。

「うごきづくり」や「うごきの感じ」を体験させる手がかりとしての様々な「もの」(教材・教具)の利用は、型にはまらない運動の楽しさを伴いながら基礎的な内容を沢山経験する機会を提供する。そして、思いもかけない「もの」を媒介に、子どもの発想を引き出し、ふくらませ、子どもの着実な力として一つ一つの活動を価値づけるのは、指導者の柔軟な発想とそれを支える指導観で

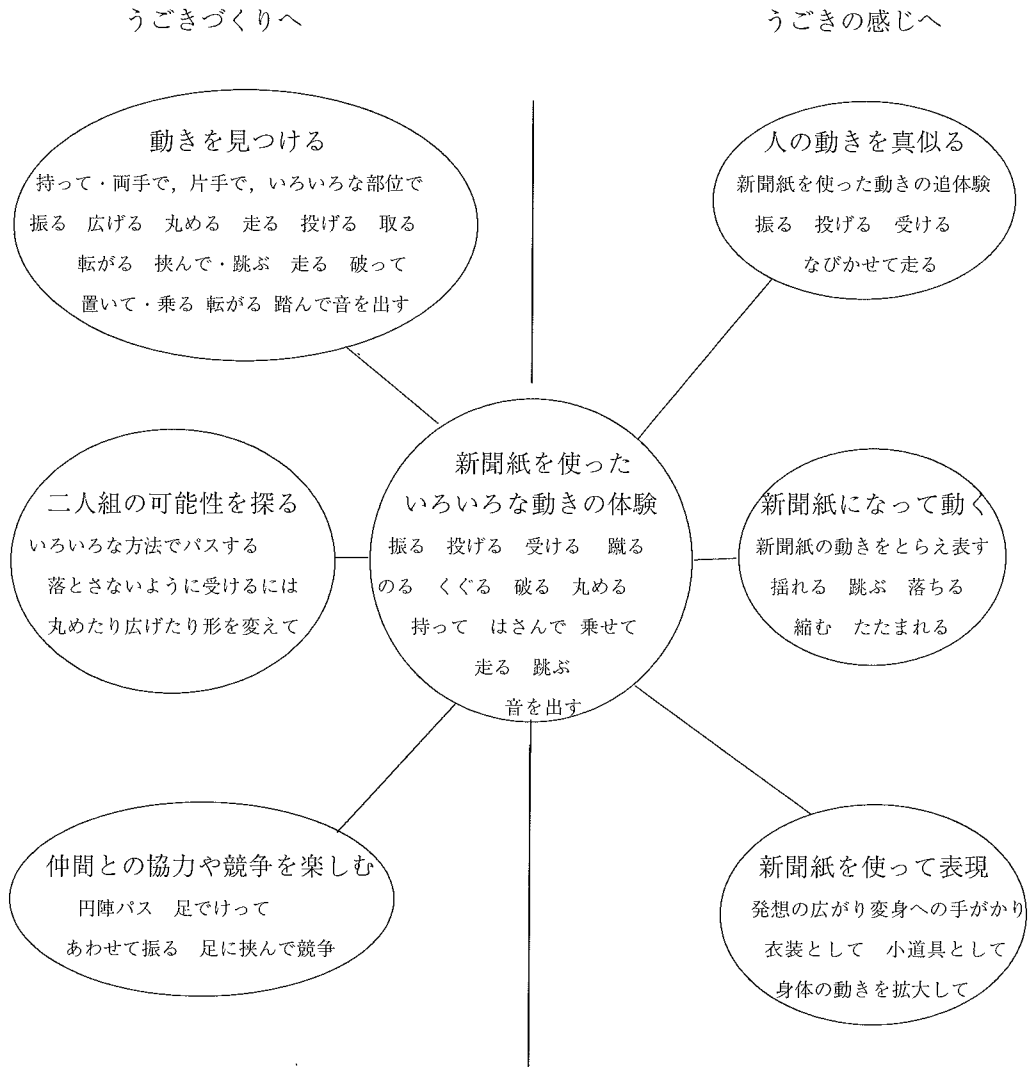


図3. 「新聞を使った運動」を例にした学習展開



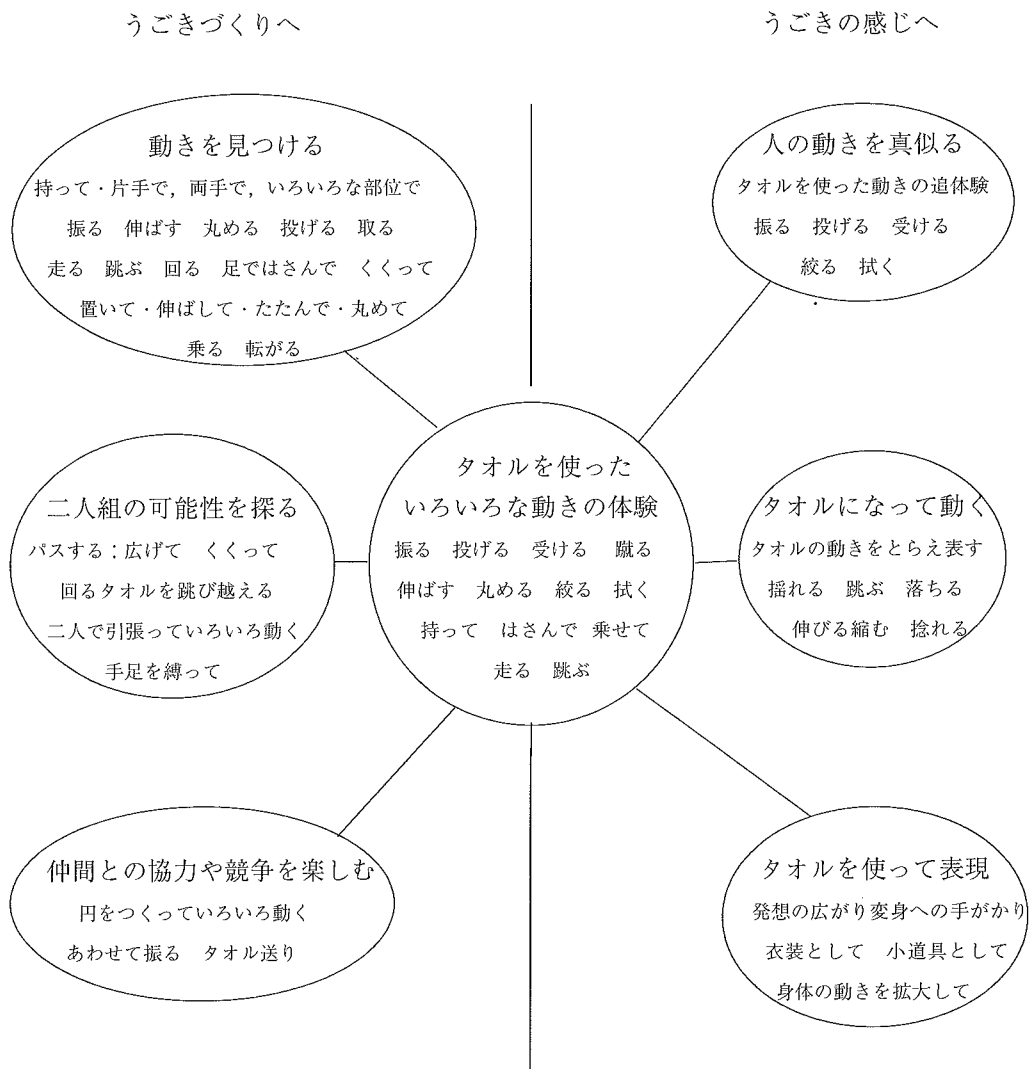


図 4. 「タオルを使った運動」を例にした学習展開

ある。教材研究の授業では、指導者としての発想を補うために、活動の具体例の提示と、それが運動や教育の理論とどうつながるのかの経路を学生に発見させる機会が準備されなければならないと考える。

## おわりに

1999年度の小学校体育教材研究の内容を、指導実践につながる内容だったか、受講生は指導力の実感を持たせたかの観点から検討した。その結果、授業内容を「全く理解できなかった」とした者はなく、「あまり理解できなかった」者も少なかったが、「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」者も多いとは言えなかった。「理解して取り組めたが、自分には指導できない」「理解とまではいかないがいつの間にか踊っていた」を含め授業中にはかなり活発に動き、学習成果が上がったかに思われたがそれでもなお指導実践につながる授業とは言えないとわかった。

しかし、「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」が比較的多かった内容は、単純で明解なひとつの手がかりからいろいろなうごきが引き出せること、取り組みやすい手がかりであること、でてきた動きの評価がわかりやすいこと、言葉での説明があまりなくても指導できること等の共通の特徴を持っていたのではないかと示唆も得た。また、「タオル」を使った学習展開に関する調査で、受講後には「うごきとダンス」に関する内容を上げるものの増加、教材研究の授業内容が応用されていたなど受講が教材の取り入れ方やその指導への発想の手がかりにはなっていること、ボール運動での模擬授業の経験が、「うごきとダンス」の内容の工夫や学習展開にも結びついたことなどが言えそうであった。

「理解して取り組めたし、自分にも指導できそうに思った」とした学生が比較的多く、「タオル」の指導にも応用していた「新聞君」を手がかりに「もの」を使った学習展開を考えたが、他の内容についても同じように指導の発想を引き出す手がかりをより明確に具体化して提示するのが今後の課題である。特に「理解とまではいかないがいつの間にか踊っていた」が多かったリズム系の内容の検討が必要である。

## 文献

- 桑原知子 中学年表現「私は新聞紙」ダンスの教育学2「表現運動」の学習 徳間書店 pp.85-86 1992  
 佐分利育代 ダンス学習における「新聞」の教材化について 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第26巻 pp.81-95 1984  
 佐分利育代 ダンスの即興表現の発達について—聴覚障害児を対象にして— 山陰体育学研究2号 pp.29-34 1986  
 佐分利育代 「見る」活動からはじめる創作ダンス学習 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第31巻第2号 pp.326-333 1989  
 佐分利育代 教員養成におけるダンス教育の課題 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第38巻第2号 pp.381-390 1996  
 佐分利育代 松本典子 心が動き身体が動く子どもへ—幼稚園・小学校の教員養成として— 全国女子体育研究大会鳥取大会研究紀要 pp.101-108 1999  
 柴真理子 ものを使って動こう「新聞紙を使って動こう」身体表現 東京書籍 pp.182 1993  
 松本富子 高橋和子 茅野理子 細川江利子 佐分利育代 広兼志保 畑野裕子 現職教員のダンス指

- 導実践に影響を及ぼす要因の検討—大学時履修経験が与える影響について— 舞踊学 第16号 pp. 12-23 1994
- 宮本乙女 男子中学生が新聞紙と戯れ・戦う：新聞紙を用いたダンス授業 体育の科学 vol.47 pp. 592-596 1997
- 村田芳子 新聞紙と遊ぶ—新聞紙を使った表現 最新楽しい表現運動ダンス 別冊教育技術 第14巻第2号 pp.24-27 1996

(2000年5月1日受理)

